

共同大学院の学びからおりなす放射線看護
——災害被ばく医療科学共同専攻修士生の将来へのビジョン——
Radiological nursing by learning of joint graduate school:
Vision for future of the students who completed disaster and
radiation exposure medical sciences joint degree

小野寺 悦子^{1,2}

Etsuko ONODERA^{1,2}

- 1 福島県立医科大学大学院医学研究科災害被ばく医療科学共同修士課程
- 2 宮城県登米市役所

- 1 Division of Disaster and Radiation Medical Sciences Joint Major
Fukushima Medical University Graduate School of Medical Sciences Master Course
- 2 Tome City Miyagi

2016年4月 被ばく医療科学・放射線リスク学で実績をもつ長崎大学と、東日本大震災を経験し災害医療分野での実績をもつ福島県立医科大学、それぞれの大学の強みと特徴を活かし、被ばく医療科学分野に精通した人材育成が始まり、2018年3月には第一期生が卒業しそれぞれの分野で活躍している。

本シンポジウムでは、修士生による在学中の教育や研究に関する学び、修士後の実践活動や将来へのビジョンについて報告し、放射線看護の専門職育成の意義を討論した。シンポジストによる報告の概要は以下のとおりである。

・環境省において放射線健康不安対策事業を企画し、専門職向けの研修会の実施や放射線の正しい知識を普及するためのパンフレットの作成さらに看護系大学における放射線看護を学ぶ学生の輩出に尽力している。

・大学病院の看護師として放射線診療の看護に従事するのみならず、大学院での学びや研究の視点・方法をスタッフ間で共有し臨床の場に活かし、今後は放射線看護学分野における指導・教育に貢献したいと考えている。

・大学災害医療総合学習センターに所属、放射線災害医療セミナーを実施、eラーニングの開発、避難者健康相談等に従事しながら現在、博士課程に進み学童の放射線認知に関する量的研究に取り組んでいる。

・自治体保健師として、防災計画がより実践可能なものとなる取り組みを開始、さらに平時の地域保健活動を住民と協働することにより地域力を高め、「健康づくり」を切り口とした災害に強い「地域づくり」に取り組んでいる。

シンポジストの報告後、フロアより国や地方自治体・医療機関・大学というそれぞれの分野での実践報告を受け、大学院での学びを最大限に生かし活動しているだけでなく、具体的なビジョンを描いていることを知り今後の活躍に期待すると発言いただいた。今後、災害発生直後は危機管理に迅速かつ適正な対応とさらに、復興期は長時間を要するコミュニティの再生へ寄与するため、放射線と災害に関する専門職の育成を継続し、経験を次世代に伝えていく重要な役割を大学院が担っていることを再確認した。